秀賞

曽祖母の言葉と氷砂糖

山形県山形市立第十中学校
二年　早坂陸翔

小さい頃からずっと、月一回くらいのペースで山辺の母の実家に遊びに行っていました。行くと必ず九十三歳になる曽祖母とお話をするのが楽しみでした。曽祖母は少し足が弱いものの、いつも元気に僕を迎えてくれました。曽祖母は優しくて、いつもおこづかいをくれます。僕のためにお金を貯めてくれていたそうです。でも小さい頃は、おこづかいより、手のひらにそっとのせてくれる氷砂糖のほうがうれしかったのを覚えています。透明できらきらしていて、口に入れると気持ちのいい甘さが広がって、あの味は今でも忘れられません。

曽祖母とは、友達のことや学校でのできごとや勉強のことなど、さまざまな話をします。僕の話をいつも笑顔で聞いてくれて、一緒になって笑ったり悩んだりしてくれて、会話が弾んで途切れることがありませんでした。

そんなある日のこと、また山辺に行く日になり、今日も楽しいんだろうなと思いながら向かいました。着いてすぐ曽祖母の部屋に行き、いつものように話をしていました。すると、曽祖母の言葉と動きが一瞬止まったと思ったら、そのまま倒れてしまいました。何が起こったのかわからず、「ひいばあちゃん」と声をかけても返事がなく、僕は手や足が震えていました。それに母が気づいて、病院に運ばれることになりました。救急車が出たあと、曽祖母が心配で涙がこぼれました。

病院に着いて曽祖母は意識が戻り、いろいろ検査を受け、貧血から起こったということがわかり、みんな一安心しました。でもそれも束の間、別の病気が進行していることがわかりました。その病名を母から聞いたとき、今まで体験したことがないくらいに足が震えていました。生まれて初めて、大切な人がいなくなってしまうかもしれない怖さを感じました。

次の日、みんなでお見舞いに行ったら、思ったより元気になっている曽祖母がいて、安心しました。僕は前日にできなかった話をしようとしたら、曽祖母は僕の手を握ってこう言いました。

「いいか、これからの人生、どれだけ遠回りしようとくじけてはいけないよ。例えばね、将来こうなりたいとか、勉強や部活で成績をあげたいとかあるなら、その夢に向かって努力しつづけることこそが、自分自身を変えるためのたった一つの鍵になるからね。」

唐突で、何を言われているのか、どういう意味なのかつかむことができないでいる僕に、曽祖母はいつものように優しく笑っていました。

しばらく入院して、曽祖母は息を引きとりました。合い間をぬって何度もお見舞いに行き、いつものようにお話をしましたが、あのときの言葉の意味をなぜか問うことができず、聞かないままになってしまいました。

僕はよく曽祖母に愚痴や弱音を聞いてもらっていました。僕が所属する卓球部は、二年生だけでも十人います。小学校からクラブに入っていた人もいるので、選手に選ばれるのも一苦労です。だから、上位に入るために必死に練習をしてきました。でも、どうしても勝てない仲間がいました。その人も中学から卓球を始めて条件は同じなのに、徐々に部の中でエースになりつつあります。どうして勝てないのだろう、悔しくて焦って不安になることがあります。でもこのままでは変わらないから、まずサーブに磨きをかけようと、また練習に力を入れることにしました。

そういえば、なかなか勝てずにいるとき、曽祖母にこの話を聞いてもらったことがあるのを思い出しました。―遠回りしたって、くじけちゃいけないよ。努力していたら、自分を変えることができるからね―。曽祖母からもらった言葉は、まさに今の自分に一番必要で、一番大切なことだったのだと気づきました。

僕は勉強でも学級委員の仕事でも、できる限り努力しようと思っています。でもきっと不器用なほうだから、人より時間がかかります。学級の仕事ももう一人の委員に迷惑かけているだろうな、もっと上手なすすめ方もあるんだろうなと反省することがよくあります。曽祖母はそんな僕をよくわかってくれていて、精一杯励ましてくれたのだろうと思います。―それでいいんだよ。今やってる努力は遠回りと思うかもしれないけど、そのまんまでいいんだよ―。

僕はこれから何回も曽祖母の言葉を思いだすだろうと思います。くじけそうになったとき、目標を見失ってしまったとき、この言葉が僕に元気をくれると思います。まるであの氷砂糖のように、きらきら輝いて甘さが広がって、僕の中に残っていくのだろうと思います。